

# ナショナリズムの力

白川俊介著

## 共同体の絆に希望託し



(勁草書房・4200円)

しらかわ・しゅんすけ 1983年生まれ。九大院比較社会文化学府博士後期課程修了。

世界はグローバル化したという。一方で「自由や民主主義」といったリベリズムの原則が「世界標準化」し、他方でナショナリズムは、紛争や暴力の温床として忌避されている。確かに、国家や統合の名の下に、個々人の多様性が押し潰されて来たおぞましい歴史を想起する時、ナショナリズムの克服という命題は説得力を持っている。しかし、これも考えられる。リベリズムとナショナリズムは本当に相容れないのか、むしろ共同体の「絆」こそが自由や民主主義の追求を可能にするのではないかと。

本書が示唆しているのはこうした発想の転換である。それは、「政治的共同体」と「文化的共同体」の一致を前提とし、ナショナルな紐帯を媒介として、自由と民主主義を追求するリベラル・ナショナリズムの理想である。その表境に向けて本書が提唱するのは「雑居型」ではなく「棲み分け型」の国家構想である。文化的に中立な政府の下で諸々の共同体を保護するのはなく、文化的共同体のそれぞれに自立性を認め相互に承認し合うことで、他者を尊重するという構想である。本書はこうした視角から、民主主義、社会的連帯、移民、分離独立、地域統合等の具体的事例への処方箋を提唱している。

自由や民主主義は、文化の共有された空間において最もその意義を発揮するところ命題は理に適っている。だが、それだけで十分であろうか。私たちは比較的均質な文化を保持、共通の言語を持った共同体を構成しているが、文化や言語の共有は共同体の紐帯を築き上げるうえで必ずしも十分ではない。足元を見れば、「原発」や「震災がれき」の問題が国論を二分している。先鋭化された利害対立は、時として理性的な議論を阻害する場合がある。共有化された文化の中へ、共同体としての「共感」を育むことは容易ではない。しかし、このように時代だからこそ、ナショナリズムに「希望」を託したいという問題意識は評価できる。課題は残されるが、今日的意義に溢れ、時宜に適った一冊であろう。(九州大准教授・政治学 大鍋哲)